

生きるための居場所を求めて ～災害拠点病院としての機能を保管する病院前広場の提案～

1160087 高樽奈央子

高知工科大学 システム工学群 建築・都市デザイン専攻

1. はじめに

近い将来、南海トラフ巨大地震が発生すると言われている。その被害は、高知県だけで負傷者数3万6千人、死者数4万9千人と想定されている。そして、これらの人々の受け皿となるのが基幹災害拠点病院である。しかし、東日本大震災が起こって以降、新たな医療体制が組み直され、数多くの病院が対応に追われている。高知県で唯一、基幹災害拠点病院に指定されている高知医療センターもその一つである。そこで本設計では、平常時と災害時の両方で機能する患者中心の病院を提案する。

2. 計画地



写真1. 航空写真



写真2. 高知医療センター

高知県高知市池に位置する高知医療センター。対象敷地付近は、北は下田川、西は浦戸湾、南は土佐湾によって囲まれており、浸水によっては孤立する可能性が高く、早期の支援や援助が受けられないと予想されている。

3. 高知医療センターの問題点

調査では、高知医療センターの災害対策担当の方と看護師の方にインタビューを行った。高知医療センターは、開設より10年が経過しており、病院としてはしっかりと体制が取られている一方で、災害面では対応しきれない点が生じている。

〈問題点〉

- ・ 備蓄倉庫が足りていない
- ・ トリアージエリアの確保が不十分
- ・ 医療スタッフの仮眠スペースが足りておらず、メンタルケアできるような場所もない
- ・ 安否情報室の設置場所が考えられていない等

4. 提案

4-1. 高知医療センターについての提案

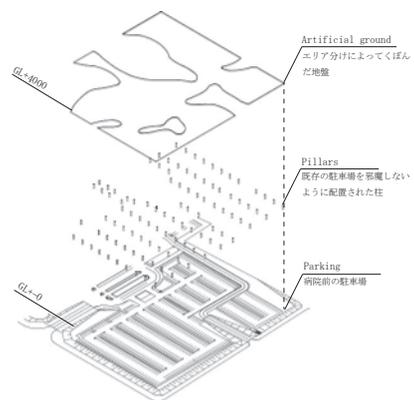
高知医療センターの問題に対応した汎用性の高い施設し、災害拠点病院として平常時と災害時の両方で十分に機能する機能を提案する。

4-2. 病院そのものについての提案

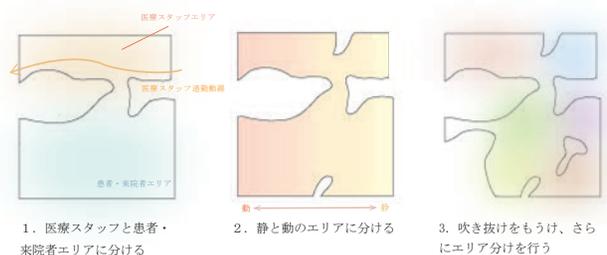
今の日本の病院は、「病気を治す」という機能から効率性を重視した空間づくりが行われている。そのため、本当は一番考えられるべき患者への配慮が後回しされ、医療者本位になっているように感じる。実際、現在の医療には患者の心の問題が置き去りにされており、非日常空間で患者はストレスを感じやすくなっていると考えられる。そのため、患者中心のストレスから解放されたくつろぎや安心感を覚える空間を提案する。

5. 計画

病院の駐車場上に人工地盤を設け、人が安心して歩けるような場所をつくる。また、緑化を行い、自然と直接触れあえるような環境をつくる。



6. ゾーニング



1. 医療スタッフと患者・来院者エリアに分ける

2. 静と動のエリアに分ける

3. 吹き抜けをもうけ、さらにエリア分けを行う

8. 平面図・断面図



9. エリアと機能

9-1. 学びのエリア

- ・気ままなライブラリー

本は自由にお気に入りの場所で読むことができる。

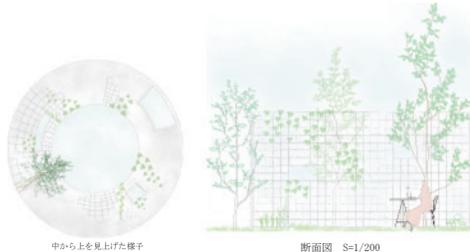
- ・ちいさな農園

有用植物や野菜を育て、収穫したものはカフェやフリーマーケットで提供する。

9-2. 安らぎのエリア

- ・ひとりの森

囲まれた空間に安心感を覚え、静かにゆっくり過ごしたい時に訪れる。



9-3. 憩いのエリア

- ・リハビリの森

自然の中でリラックスしながらリハビリを行う。

(歩行・階段昇降・ストレッチ等)

- ・つどいの足湯

景色を楽しみながら足湯につかり、心とからだを休める。

9-4. にぎわいのエリア

(災害時：情報安否室・トリアージエリア)

- ・おしゃべりカフェ

お見舞いに来てくれた友人や家族たちと周りを気にせず一緒に過ごすことができる。

- ・丘の広場

体を動かしながら遊んだり、イベントの際は野外ステージとして使用する。

- ・みんなのギャラリー

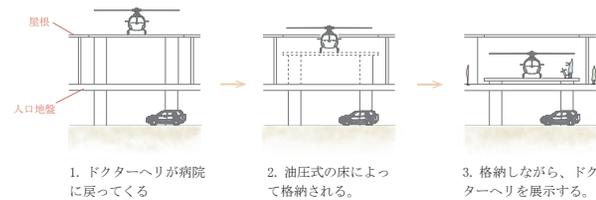
定期的に院内教室が開かれたり、災害医療について学べる学習コーナーがある。

9-6. ヘリポートエリア

- ・それいけ広場

出動している時以外は、格納されたドクターヘリを周りから見学することができる。

ダイアグラム



9-5. くつろぎのエリア

(災害時：備蓄倉庫・医療スタッフの仮眠室エリア)

- ・みまもりの屋根

場面に応じて、休憩スペースやミーティングスペースとして利用する。

医療スタッフがランチや休憩の際、仕事から少し離れほっと一息つくことができる。

10. まとめ

本設計では、病院を利用するそれぞれの人々が「生きるための居場所」を見つけられるようなきっかけづくりを行った。また、基幹災害拠点病院としての機能を補完し、来る南海トラフ巨大地震に対するの対策を行った。

病院として、転換期を迎えつつある現在、患者中心の病院づくりの在り方がこれから求められてくると感じる。